

---

## シリバルバット登頂

大 嶽 藤 一

---

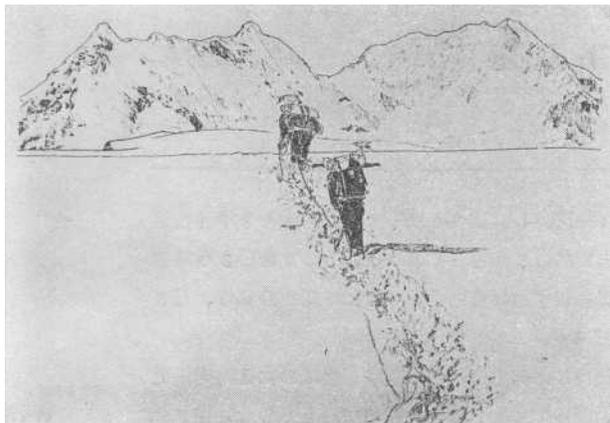
7時の交信では、彼等はすでにC3を出発し、頂へと何っていた。我々も早速彼等のサポートに向う事にした。4時頃までにC3へ帰って来れば、そのままC2へ降りて来れるだろう。そして我々がC3を撤収すれば良い。又我々に時間が許せば、C3からシリバルバットへの登頂も可能だろう。

それにしても昨日のラッセルには閉口した。急な15mの雪壁を登るのに1時間以上もラッセルを強いられた。登っても、登っても崩れる雪に持って行き処のない憤りを感じ、唯、闇くもに雪をかいていた。しかし今日はもうそんなラッセルからは開放される。ただ軽い荷を背負い登ればよいだけであった。そして天の恵みのこの天気を感じつつ、アタック隊の行動を見守っていよう。

我々が氷河の略奪点に着いた時、アタック隊はまだそれ程進んでいなかった。C3から雪壁状の稜線までは30分位だろうと考えていたが、それはあくまで下から見た判断でしかなかった。稜線へ上った彼等は予想以上のナイフリッジと起伏の激しい稜線に、思わぬ時を費しながら、一步一步高みへの戦いを続けていた。下から見えた稜線上のピナクルはやはり彼等の行手を遮り、稜線のルートを塞いでいた。トランシーバーの交信では、何んとピナクルの穴を通して、そこを突破したとの事であった。

我々は昨日のラッセルが信じ難い程、堅い雪の上を歩いていた。しかしキジを打ちに行った者は腰までのラッセルに苦笑いを浮かべて来た。ラッセルの跡に我々は一葉の枯葉を発見した。この殺伐とした世界に、唯、岩と雪の世界に、少なくとも生命の跡があった。恐らく下から風により舞い上ったのだろう。しかし木のある所まで2000m近い高度差があった。この枯葉はこの高度を旅して来たのだろう。そして我々はこの枯葉に安らかな憩いを憶えた。

昨日悪戦苦闘した雪壁に張ったフィックスもスノーバーが効いてしっかりと、我々の力になっていた。昨日何度やっても抜けるスノーバーに半ばあきらめ、付けないより付けた方が良かったらうと張ったフィックスであった。一日の内に1mに満たないジャラルミンの角度を氷はしっかりと固定していた。この雪壁の角度が急に傾斜を変える所にあったクレバスもやはり無気味に開いていた。恐らくはこのクレバスがさらに広がり、登って来た雪壁は一枚のとてつもなく大きな雪板となり、崩れ去るの



だろう。今崩れるとは考えられないが、やはり気持の良いものではない。

そのすぐ上の稜線直下のわずかな台地がC3であった。アタックキャンプと呼ぶには余りに貧弱なキャンプであった。ポールをつけた小さなツェルトだけが、我々の存在を示していた。11時、我々はC3に着いた。200mの望遠レンズで彼等を探した。彼等は小さな黒点となり、見

え隠れしながら、二つの黒点が一つになり、又二つに別れていった。まだピークは遠い、今日中にC2へは戻れないだろう。

我々はシリ・パルバットを目指すことにした。調子の良くない那須をC3に残し、彼にはアタック隊の写真を撮ってもらう事にする。私とワンギアルは早速アタックの用意をして出かける、稜線までの雪壁はアタック隊のフィックスで何んなく越える。僅かに雪庇の張り出した稜線は下から見るとポツカリと穴が開いている様に見える。稜線へ出て驚いた。やはり下から見た稜線は小さな起伏としか見えなかったが、ナイフリッジでギザギザの稜線がピークへと連らなっている。これでは彼等が時間がかかったのもうなずける。

雪にピッケルを打ち込み、その上にどっかと座りワンギアルを上げる。ここからシリ・パルバットのピークは隠れて見えない。C2からの見当では、そう遠くない筈である。今度はワンギアルを先にやる。10m程進んでザイルが止まった。彼は見えない。私に上がって来る様に言っていた。しかしザイルはまだ30mもある。彼に先に進むよう指示したが、片言の英語の為に通じないのかと思い、とも角ワンギアルのいる所へと進んだ。彼は手なれた手つきでザイルをさばき、私を迎えた。「サーブ」と指を差す。そこに目を移すと、リッジはそこでスッパリと切れていた。アプザイレンをしなければ下りられない様である。左は雪庇があるし、右は下の氷河まで垂壁に近い雪壁が無気味に切れ落ちている。下の氷河が何んの障害物もなく、くっきりと眼に映った。1000mか、あるいはそれ以上か見当もつかない。

と、黒い小物体が音もなく落ちて行った。それはものすごいスピードで氷河にすい込まれていった。もし大きければ見える筈であるそれは氷河に溶け込んでしまった。

私は右手に残ったストラップに目をやった。カメラは無惨にもストラップだけを残し落ちてしまった。ストラップが切れたのなら話は分る。しかしそれはとても切れそうにない、アルミのボディから欠け落ちてしまった。寒さの為だろう。ザイルをたぐる時に力が加わったのだろうか。

これからピークへ行っても写真は残らない。それをワンギャルはしきりに残念がった。サーブ、カメラ。サーブ、カメラ。と締め切れない様子であった。我々は自分の為にこの地まで来た。それは生活の糧の為でなく、あくまで遊びの域を出ていない。

しかし彼は違う。自分の生活の糧として、我々と共にこの殺伐とした世界に入り込んでいる。頂上の写真は彼等にとってそれだけの意味があるのだろう。ワンギャルには可愛想だが、どうすることも出来ない。とも角、ピークを目指そう。

私は引返そうと言うワンギャルをなだめ、(カメラの為ではなく、切れている稜線の為に) 下降ルートを捜した。幸いここはC3から見える位置であった。那須を大声で呼び、雪庇の状態を尋ねた。それ程の張り出しは無いと言う。それなら一番傾斜の少ない雪庇よりを降りよう。ワンギャルにしっかりと確保を頼み、後向きになって降り始めた。

もし雪庇を踏み抜いたら私の体は宙に浮く筈だ。何んとも不安な一步一步であった。幸い雪は硬くも柔らかくもなかったがスタンスの間隔が垂壁の為に膝を曲げられず大きく取れない。右足と左足のスタンスはオーバーラップしながら、右手はピッケルで左手にはアイス・ハーケンで確保しながら降りた。約10m程でコルに降りた。下から見上げる壁は、上から見下した壁とは比べ物にならぬ程貧弱であった。ザイルをいっぱい延ばし、ワンギャルを迎える。再びワンギャルを先にやり、つるべで登る。

もう一つのピークでワンギャルは再び止まり、私に先へ行く様に言った。もう先程の下降をしているので二度目は気が楽であった。再び慎重に下り、ザイルをたぐる。ピークを四つ位越えた後は、緩やかな傾斜となりピークに続いていた。ここからではその向うにピークがある様に思えた。しかしコンティニューアスで登りつめると、もうこれ以上の高さはどこにも見あたら無かった。ワンギャルは頂上の6m程手前で立ち止まった。彼は私に先に行けと言った。思わず私に涙がにじんだ。言ってみれば誰が先に行うとたいした違いではない。しかし私には、彼の我々に対する心づかいが嬉しかった。私は彼の気持ちにしたがいピークに近づいた。彼に確保を頼み、緩やかな斜面を登りつめた。そして一番高い所は明らかに雪庇であった。私はC2からこのシリバルバットの巨大な雪庇を見ていた。後1mでC2が見下せるだろう。しかし私はそ

れ以上進むことが出来なかった。ここで雪庇を踏み抜けば元も子も無くなる。ワンギヤルも上がって来た。時計は丁度2時を指していた。

すぐにトランシーバーを取り出し、ファブランのアタック隊を呼んだ。この時偶然にも、彼等も又南峰の頂に上がった時であった。

私たちはここで何も持っていない事に気付いた。カメラもないし、旗もファブランのアタック隊が持っていつている。私はビスケットの空箱に、この遠征隊名と私とワンギヤルのサインを入れ、雪に理めた。この頂は雪峰で岩の一かけらも無かった。頂上の石が無いのは残念だが、もう降りよう。ここから見るファブランは立派だった。両翼を大きく広げた鷲の様に、我々の目前に広がっていた。

途中、登って来る時は気が付かなかったが、コンティニューアスで下っている時C3が見えた。那須に我々の写真を撮ってもらう。頂上より少し下った所だが、無いよりましだ。

先程の垂壁も登る方が簡単だった。C3でアタック隊の為に天幕の整理や水を作る。彼等は下り始めたが、この分では日が落ちてからC3に戻る様になるだろう。4時、トランシーバーでアタック隊と交信し、彼等の無事を祈りつつC3を下った。